

GAMBLE



ルージュ (赤) か ノワール (黒) か、
 ベール (偶数) か アンベール (奇数) か

ギャンブルをする人にとって、その魔力はいつも同じです。
 華やかなカジノのルーレットも、裏路地の路上の賭博も意味は同じです。
 人生の憂や、倦怠や、理性や、暗い記憶や、未来への不安を、一瞬の燃えるような強烈な興奮に変えてしまうもの

目の前に積み上げられるチップの山、紫煙にけむる光と影、人さまざまのため息、多くのかげ引きが
 こめられる視線 羨望 悪の気配 暗い欲望 黒い情熱
 たぶん ずっと昔から いつも変らなかったこの不思議な生き物

表 (HEAD) か 裏 (TAIL) か
 ルージュ (赤) か ノワール (黒) か
 ベール (偶数) か アンベール (奇数) か それとも "0" ?

News

ミルクホール主催
 今年最後の催し物
 THE LAST PARTY
 のお知らせです。
 12月最後の土曜日に
 今年最後のパーティを開きます
 どうぞ御参加下さい。



1987
 "THE LAST PARTY"

by MILK HALL

1987 Dec. 26th Sat.
 at MILK HALL
 PM 7:00 ~ ALL NIGHT
 ルーレットゲームもあります
 (賭博ではありません)

AUTUMN BAZAR

ミルクホール 秋の市

10月27日 ~ 12月15日

空に木枯らしが舞い、そろそろ冬を運んで来る季節になりました。
 フルハウスでは、ミルクホール秋の市を開催しております。売り出されているのは、明治、大正、昭和の古道具、骨董品などで、それらは私達が永年かかって、ミルクホールの為に集めた品々です
 地方の蚤の市へ出掛けて行って買い求めた物、知り合いから譲り受けた物、それこそ道端で拾い、手直ししたり修理したような物。10余年の間、ミルクホールで使われたり、飾られたり、なぜこんなほりだらけの使い物にならないような物に、魅力と愛着を感じ今迄大切にしていたのでしょう。

使えないストーブ、いゝ本当は使えるんです。でもとても暖房器具と言えないしろものではありません。なかなか鐘の数の合わない柱時計・・・これも毎日ネジさえ巻けばちゃんときを刻むのです。
 水が無ければただの箱の冷蔵庫、かけたお茶碗、古ぼけた絵・・・この、日本の文明の幕明けに作られた品々には、日本古来よりあみだされ、江戸に花ざいた職人芸を受けつぎ、次の時代へ確実に手渡そうとする当時の職人たちの気迫が、きちんと組み立てられた木組や、小さな金具の把手や、ちょっとした木彫りの飾りや、たんねんに考えられた模様のパターンから、そしてその確実な仕上げから伝わって来ます。

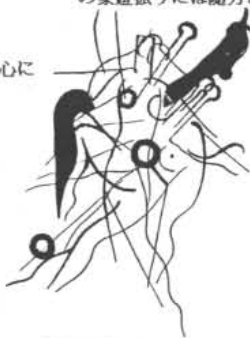
そして昭和の無残な敗戦からよみがえった日本人の熱っぽさと優しさ、先祖達から受け継いだ器用さと、まだまだ生き生きとしたこまやかな物達。

そして、いつのまにか崩壊され無秩序な機械生産へ。60年代70年代のその大きな時代の流れに抵抗するように様々な、私達の先祖にくらべると稚拙だけれど若い自由な抵抗心に燃えた工芸や芸術、音楽など。

そして1980年代、なにもかもが崩壊してゆく時代の中で、ほろびゆく感覚を記憶の中で手さぐりに見つめています。

ミルクホールタイムズ編集部より

ミルクホールタイムズ御愛読頂きまして有り難う御座います。
 編集部では、定期購読者を募集しております。
 御希望の方は、御住所、御名前に60円切手12枚又は720円を添えてお申込み下さい。1年間毎月郵送させていただきます。
 〒248 鎌倉市小町2-3-8 ミルクホール宛



Milk Hall Times 14th



COLUMN

私の店の前に黒いベンチがあります。ミルクホールに何度か足を運んで下さっている方は御存じの事でしょう。ある時は帰り際にお手洗に行った相棒を待っている人、ある時は休日の混雑時に空席を待つ人、またある時は歩き疲れて店に入る前に早々とつろいでしまう人、などなど、ベンチは外にありながら実は店の一部でもあります。けれどもその黒いベンチにはもう一つの別な顔もあるのです。

毎朝、私は店の前でコーヒー豆の渋皮吹きをした後、玄関の掃き掃除をします。その間約10分間。先日、いつものように渋皮を吹いていると、ベンチにお婆さんが二人座って、なにやら世間話をしています。私と彼女の距離は約1m、聞くとはなしに話は耳に。どうもお互いの連れあいの話らしく、片方の旦那さんはどうやら亡くなってしまっていて生前の豪遊振りには随分と泣かされていたようです。二人は盛んに互いの連れあいの悪口を聞き、こちらがその前を掃いているのにもかわらず、いっこうに動く気配はありません。半ば諦めながら水を撒いていると、連れあいを亡くした方のお婆さんがふっとため息をついて、

「でもねえ、死なれちまうとねえ。どんな亭主でも生きてて欲しかったわねえ」「うん、うん」「惚れた男味かねえ」「そうさねえ」テレビドラマの世界ではよく耳にする台詞ですが、私がその朝聞いたのはごく普通に年をとった普通のお婆さんの言葉でした。今朝は杖を持ったお爺さんに会いました。お爺さんは足が弱く散歩の途中いつも私の店の前で一息入れて行きます。人生の先輩であるその人達は、ベンチの前の建物は何であるかなどという事にはあまり興味が無いようです。一度、「おはようございます」と声を掛けてみようかと思うのですが、たぶん声を掛ける事はこれからもないような気がします。そして、私は相変わらず毎日コーヒーの渋皮を吹き、あの人達はその前で黒いベンチに腰掛世間話をしたり、一服したりしているのでしょう。